

草の露 : 文苑

著者	蝶二
雑誌名	龍南會雜誌
巻	5 1
ページ	4 7 - 4 9
発行年	1896-12-05
URL	http://hdl.handle.net/2298/4662

くばかり、あと追ふものを、なでうそも、果敢なくうせき、難波江の、よしや里くれ。山く
れて筑紫のはてに。さすらふも、同じ旅にし。あるなれば、猶末ありと、思ひしを、恨なり
けり。花の吉野、月の更料、語らひし、其睡言は、何せんに、命なりけり。」

よしさらば、うき身をすて、此海のもくづとならむ。なづかえや、うつくし夫は、陸に
ふし、われは海路に、わかれなむ。なみを隔つる。愁はあれ、心はいかで、隔つべき、いざや
急がむ。」

山の端に、傾く月の影、すみの江、松もみどり、に生田の森、名さへ恨めえ。こゝ舟は、すゝ
め松原、浦のべにみぬ、めたく火は、衛士かはた、和田の湊に、舟は、でむ、たつきもしらて。
えが身は、つる、泊なりけり。」

むら雲に、月は、かくりぬ。慰めし、めのもいねぬ。汐風の、音のみは、げし。たちまちに、時
ならぬ、ひいきい、とす、ごく、散るや、白玉、なみの底へ、と、沈み、行きけり。」

草の露

硯友會員 蝶

二

きぬ た (課題)

かたやまざとの秋の夜半、

月に妻こふ鹿の聲、

篋ゆ落つる水の音、

さくだにいとわびしさに、

心をくたくえづのめの、

衣うつこゑひしくなり。

夜さむのかせの身にしみて、

ゆめもむすばぬまくらべに、

かすかにかよふ遠きぬた、
いかにかしけんつち音の、
やうくたゆみ亂れつゝ、
やがてきこえずなりにけり。

まどれしあけて遠こちど、
月のひかりに見わたせば、
尾ばなが末にわくつゆを、
ふきみだりゆく夜嵐の、
たえまゝにをさなごの、
なくねかすかにきこゆなり。

舞 姫 (課題)

きのふのふちはけふの瀬と、
かはるにはやきなみだ川、
うき世の風に舞姫の、
花のすがたのひらくと、
飛びゆくかたは雲ちかき、
たまの宮居やあまぎかる、
ひなのふせやのかやの軒、
さだめなきこそはかなけれ。

保元のはるのみさかえに、
花のまどゐにつらなめて、
まらべたへなる糸竹に、
あはせかなでし舞の袖。

平家のきみにめでられて、
いろ香をかざる花ごるも、
そでのまら露れきふしの、
にしきのしとね玉の床、
すきもる風もいといてし、
きのふの春もゆめなりや。

壽永のあきのこがらしに、
ちるや紅葉のちりぐに、
みやこを落ちてうな原の、
なみのまにくたよひて、
そこの藻屑ときまはしも、
きえたまひぬときよじより、
たのしき夢のあとたえて、
やれしのさばのしのぶ草、
まのぶにあまるわが涙。

つれなきものは命なり。

かまくらやまのはし月夜、

星どるならふひとく、の、

月のむしろにまじらひて、

たちまふ人のうたてさよ。

さくと見しまにはやもちる、

花にもにたる世のなかに、

なにをたのみに玉のをの、

ながきさかえをねがふらむ。

怨情

すだれかゝげてたをやめは、

けふも終日ながめたり、

たれを去のふのみだれかも、

かぎりえられず見ゆるなり。

烟波吟草五六

獵矢ぬきつくしの海の磯のへにみさこ飛ぶなり射九人もかな
投くる箭の遠さかり行けは阿蘇の山小手かさせと今は見えなく

淋しき浦

ちゝのみのちゝの羨ことや、

はゝそばのはゝのみことや、

れもよ父よとたづねわび、

淋しきうらにゆきくれて、

よるべなきさになき沈む、

わらはやあはれみるめかなしも。

荒野乃原

えらたまのわがこやいづら、

なよたけのわぎもやいづこ、

わぎもこあよともとめわび、

あれ野のはらにゆきくれて、

たづきもしらすたちまよふ、

をのこやあはれなみだぐましも。

溪川生